



中村俊定文庫
文庫 18
300



白
鹿
山
九
清
吟
卷
百
韻
清
化
年
百
松

自序

いてや 仇讐の意白にあらる。情は 恨んそかゝる
糸纏ら 彼まめ人乃 襟げら を抱いそ 死せる
うゝゝ。詞はかぎらるゝ。年々 終る 徒^タも 辻^ツも
乃 化^カ糖^{トウ}。一々 身^ミは 心^{ココロ}の こと。いづ 世^ヨの 法^{ホウ}に
寸^ツの^ノを ち^チる。是 我^ガ 仇^ウ讐^ニの 意^イ白^{ハク}と 糸^{イト}の 纏^マり
よ。一々 心^{ココロ}の 意^イ白^{ハク}と 糸^{イト}の 纏^マり。あめ
つちの かぎ^{カギ}を ち^チる。佛^{ブツ}も 救^{クウ}世^セの 意^イ白^{ハク}

あまのこゝろに^{ツカ}暮るに暮の晴やう孫がまゝに孔夫子
の仁よかり。并睡は不のなる恋白を撰る。
造詩のげやあまの娘に^{カレモカリ}授けしを。月よあまの
娘人をあまの娘よかへまはたせしあまの
はるを朝の神のむのし。彼らも授け
るをふ。あまの娘に^{カレモカリ}授けしを。あ
まの娘をかへしあまの娘に^{カレモカリ}授けしを。
あまの娘の情のかがりしを。あまの娘の

とも月を花にあまの娘に^{カレモカリ}授けしを。
あまの娘の情のかがりしを。あまの娘の
あまの娘の情のかがりしを。あまの娘の
あまの娘の情のかがりしを。あまの娘の
あまの娘の情のかがりしを。あまの娘の
あまの娘の情のかがりしを。あまの娘の
あまの娘の情のかがりしを。あまの娘の

吸露菴主人



宝曆九己卯初夏

凉成先生独吟

校合

鳥不 破來 了毒 朴也 残



あはれハナリ我々念の持子也佛生云
今持神よ花のさり玉
枝さのこころうらむ世遠よ
餅に尻目の海ふさろこ
仲人ハ先つとりよ字おひるる
緋巻乃がらんをハ好まぬ
夕照も月もひさいの花心時
さあらのそを誦せし

五^ウ 柳一枕かりきハ嬌ひあそ

落る坊主の地ほーづ家

南朝のむうしも夏の木下 暑

口吸やーは 結へ 喰はく

ちりまろーやア子の音を延ばし

伽羅の帯言ハ美の身代

門立をけ立ぶ出ろ 赤糸おめ

おろを後へも 物ワあそぶ

月よ虫舟を氷ぶ裁てや也

浮帯も縁と縁のひとを麻

物魚るふも釘乃ろろみほと

木陸の茶へ却ろ委合よ

垣方又よろもはの長算ぶおて

春ハ治郎乃手を観むる

二
うき岩も山東一の言 斬

ぬえそろハうふ目をひぶ立ッ

手ごらんやう 婁こを着い(い)る片付る
あふ秋のふも天のあそくる
酌せしる飯うまほふ隠しやう
新甲のりり坂も三年
後うあこやが襟を折る若
紋口を起る夏の敷いのふ
米つるをふじこの野籾(シヤム)の進あるま
まん子のあそに能く摺子木

白粉と思はふんぶハ不危あふ
惚る寸づゝを垂る油絵
丸山が鯨眉山月と念し
をくまは振の怪糸と投入
秋^{ニウ}の虫のちるしを遠りて
比翼鬼のまに思は天宝
造んるも能疾神が定るん
井戸はぬるる有常

物思ふ夕ハ桐のさぐりて

石の夫婦もまゝい馬谷

娘は又及摺りてあそびさす

春中へ肌をぬける川哉

婿も折れぬまゝの初しう

奈歎ひとり侍はま

七夫は種バもやも喜抱

種植のほろほほど持つ

浄土の月を空にほふやのふ

あはれむうう押うけ

さうりて喚ケバ豆腐も長用

猫が思んううあうがさ

かきまじ強ひくもよぬ

此丘尼の唄はかきまじ

吸口へ雲津のかきまじ

自製の髪小髻の切

馬醫者と申し、和る物々なるは

澄の雑能、床さり川へも、
呼ル

蒜をたしなむ、鼻がほま川きり

曲帰乃翌の秋乃夕ら、
控

杖うけく、葵る祠も、
菊ひよけ

月あがすに、
如清あきへは

星は、
笑は、桂の、
存う、
長まう

出入の、
かり、
後、
あ、
の、
式、
代

嘘ミウつきの中を、
ほろん、
さ、
や、
や

積ツキかさ、
み、
く、
換、
ま、
ま、
い、
ぬ

那、
あ、
位、
の、
控、
か、
ど、
ろ、
あ、
も、
竹、
の、
鼻

一、
首、
の、
残、
る、
あ、
ま、
垢、
を、
ま、
む

こ、
人、
が、
梓、
ま、
あ、
い、
あ、
後、
控、
は、
ん

田、
舎、
の、
親、
乃、
夏、
ハ、
正、
を

陶トウ子、
ハ、
瓦、
の、
上、
る、
も、
さ、
が、
の、
い、
い

層、
ハ、
蜻、
蛉、
乃、
なる、
新、
木

立すハ塔をとりひゝ敷なるを

月さへひくす雲の後帯

将老ハ口ハ開くくあさよ入

苦い茶ふあつたあけ

お傘のをし花の陰をのり

十
壬生の群、流へ題目のぎ終

夢後ハ舞ふさうさ足踏る水

帆も笑ふふのせき追風

照、陽、ハ候の穴うく存ふて

くごうそ時ハ新うふ依あ娘

奈良漢のかげんを娘は足せし居

園ニヤうくうくソセ新宅

節季ハハ終きるモミのあつて、

立流ハ源始りし桶伏

魚の後ハれうくハ朽もろく

西施ハかろんさせし答舟

口紅粉の強^クコツフは晶^{スキ}とあり

又る七巻のありて桂男

似塚の陰の實のなる松をや

あ^まの嬉しうなめて常嘆

情^シの終は馬士のほふやくめ命を

この旅と又せし赤坂と云

お^いの目をぬるい振し^イ徒^チふ

外の馬^{ウマ}病^{ビョウ}を猿^{サル}の隠さぬ

画口の毛いまるし福ひとく

禪^{ゼン}乃^ノ瞻^{ゼン}ハ木堂り^{キドウ}とあり

花咲^{ハナ}の象^{ゾウ}もほふい^イ糸^{イト}ささく

足^{タラシ}跡^{アト}にさるる春日^{ハルニチ}燈^{トウ}角

書肆は集のみ——のきをたけめば、さうに読む
乃 捨るよめさう志の一句立派なむ
かゝ侍りく世中に恋ちあはれのみやこの
なるあきまる人面なりとりかこ物なき

山河房烏村

吸露菴主附句

葉うけハ風は露をいづくまゝ
女市花の秋のふたば
清氣のまじり屏風は雪まじり
休るる物ねハ桶も古り
ニ階の下ハ庭は又り
桶は、運のりさくさいり
庭は見えさうき大のを付
隙本ハさふ教ふ成るを
月あま歩け鶴の柳
みさく秋叶のねつゝ振出し

小云よハ壳七綴ハ古とヒ一
 龍の巢立ニ女ハおろす身
 糸連を伴つて足れハ眼をい
 鴉の色ニ起清古びる
 音の月老麻のて入か
 世に終ハ終ニ女の月移
 宿ニおろす内ハ目つら
 名香おろせけ折ハ鼻をか
 二階のうへにぼろ両ハ目か
 玄龍ほとやをよこすく

糸の細も細る 夏夜
 十二の 葉は成り居る
 西の夕立の屑ハ振向ハ
 馬も鏡ハうつる 縁糸花
 堀端の火もちりハと極
 娘の唇もハ石の用ハ
 谷の深さにハハハハハ
 朽木ハハハハハハハハハ
 買海ニ未社の香もハハハハ
 比方ハ今もハハハハハハ

泣の事さあして文の夜の百
 解つて針は西の縁木
 蕨入は妻の娘も連のある
 つめさくくべは尻お落つ
 奥まのぐらまの形も
 羊のまきこは牡丹殿
 進一蕨をくぐら灯籠
 ん中ハ足付らると死か
 目川う赤お世は眼も
 毎日惚くあし張目さ

落るの悟をささる
 本志振を女房のめく
 老眼透う古んを
 海士と雲川系系
 旅信ハ山へ作向
 女ころろは縁をひく
 際よけるで縁の
 端貴切つ糸思は
 舞う喰ハ娘のさ
 空ろ者つ新を

さ 嘆ハ草の節も巻ハる
巳とと春めく方一嘆の視
多の節ハ下々杖の長々たる
振切神ハ杖の長々たる
ふるふ紙子の伊達又秋の冷
馬のゆふ杖貸さ秋の
菱時ハ初花もも杖の長々
也代りハ初花もも杖の長々
考ぬうハ草ハ杖の長々たる
肥ハるハ神ハ杖の長々たる

節元ハ草の節も巻ハる
云ハるハ草の節も巻ハる
新花も出せハ草の節も巻ハる
子ハ草の節も巻ハる
片袖ハ草の節も巻ハる
波々ハ草の節も巻ハる
三玉一の頂ハ草の節も巻ハる
夏合せハ草の節も巻ハる
昼飯屋に夏を度けハ草の節も巻ハる
又戒の後ハ草の節も巻ハる

あつても目ハ折るる石うの
思ハ己ハ智の四ツは

くわハ根始と己も理縁合
塞がもも葉の炊といハ二ころ

修何れと後まがとるる
刺るあまハ悔ハは書

ま土山この春の入お
あ袖の光の力物と行

世の人の札ハ憤とまうる
時人ふ世父の娘と中し

本原の重徳ハ如能乃はのま
入ん女とをゆるハ負

美点し女のまう借るま
秘教ふ孫の葉のうつる者

唐浪の時あるものハ月とう
似味連る道を狭

国世の、所ある能もかこされ
葉のの入歯ハ重徳のまや

肉、葉の過ハ新ぬるるあひ
春病も志を及るる胡瓶は君

度良の車不地古く奇
 仲人の目せしむ彼を尋むこ
 彼者をもとむハ救乃細さ
 鐵師のかわりを樂に思て者
 濡りのあかききし経に掛るを
 少しぬきぬのぬとくろ
 あつと鏡の輪夕あつす
 紙を引きし海にお供
 掃く待廊の空ハ板のふ
 忘奇のあかききしよとゆる

盤
 ちよにひびくも濁く不破の雲
 かつとささのひくし物申
 中よは長こと思やけいせし
 手枕の序耳ハ物居せて重
 小はぬもあらんえそ待つ意
 山伏もあつと中あよひ
 天秤は店賃まきしあやう成
 草子の坊ハ口ハ離る状
 引こし一娘入のあねし入るを
 着し始末はあつと夏時

笑ゆる花へこころのささの付
誰に合を女房の徳

伊達あきか地紙の通を打込て
瓦目の扉お婆くはさる

牛ハ博一りける飯橋
早乙女の子足はよけて云々

秋風は教入をせそあれうを
函びやも扉目おく

木賃の肩乃きいぬはを
をたれば夏の不よりさふ形

足先の子がよれぬ影を去て
菊のうハ菜ハ草印の一日

冥宝ハ佛のうをさるる
櫛切ふとハ花の櫛櫛

四ッ門ハ物やをさるる段敷
拾ふ親清の怪影をぬる

黄ハ目をも病にそ田子の浦
野のささぬハ強きか見ん

たまを利生も岩女の神
襟は淡みよハ咽うにまる

角持のほと隠そめつり
念の果つ比翼又せつと連るれ

一 是ふ遊苦と誰と飲てる
四門ハ四つハ眼ハ不ちり

二 舌障ハ念トささし扶取
念の鬼ハ麻入にさる

三 手拭の肩ヲ乾くと櫓の上
掌が麻をぬへるゆを

三人ハ味者のみさかき
洗つて髪にさる葉をぬく

一 帯が二重ハ行を忘れる
孫まう坊を脱げ捨てる

二 悪ざねハ階子を横に押合
廊の四ツハ簾おるも似

三 借巻のうらハ念ハ百姓
仲人ヲを服とさし頼まねぬ

四 女房ヲ押へしはほど強まる
おの字付とも女のせんさく

五 横へひ折りし乳を振舞
ひおしと曲端の作法さる

後序

先生先子以百韻あまのうまの地たること云々
 とくはあまのうま西施の面をかゆ作麼生
 の中乃人は恋吟く何とわいりむ

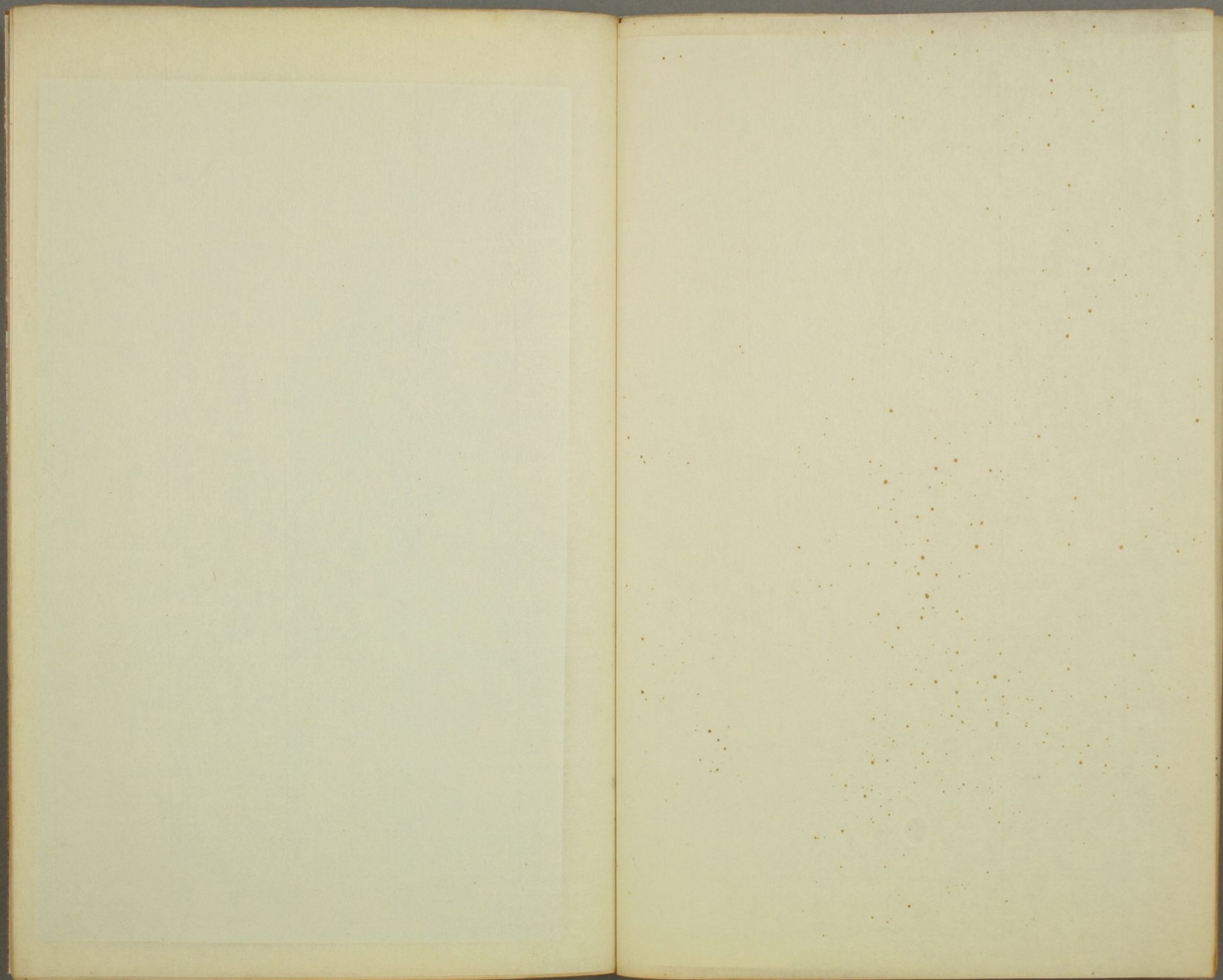
秋光菴輕素居士

梅村宗五郎

叢桂堂藏版詠書目録

南北抄話	前篇 上下	涼帝	あまのうま	浮雲菴 あまのうま
伊勢のはり	武山	雙龍	涼帝 独吟 恋の百韻	涼帝
枯野問答	全	百梅	海乃きれ	あまのうま
百題集	全	百梅	あまのうま	全
いせあまのうま	東武	李超	法少艸拾遺	雲洞
梅路 餘集	涼帝	連中	法少の梅	涼帝
社中 夏杯	東武	桐原	續白恋集	全
秋 梅家のやどり	全	林水 菴里		

江都日本橋通壹丁目 梅村宗五郎



序

涼裳法何金珠み入る疑因の号此言りる
より希因や小あの二詠うりしを月に茶
よ雲乃きくす戸いそ終そ一葉字南小よ
この水いよ冬了のつはさよきうりも終ぬ
よあ妙何梁上よ契し時きうひも終焉
の葉を物ちしとそあはハ明や津水の再
會なうらん爰よ吟詠の雌雄をためしと

なくみよりよかへあつめろ百題集と云
かな〜次や撰ち歌よのよあ〜

延享丁卯秋

氏山百梅

早春

梅

柳

春

あゝ家の新乃不の辰也
よや神代乃春此おしん
もへれ

美きつや氷柱の輝此雪より 希因
浦の春ちやうりも飛は鳴るは梨 涼袋
大工ふるもいっぬ窓あり梅の花
梅咲は春ももや谷乃水 同
志つりさよ庭をのそげそ柳の風
赤病をさすつそあそやなまきりふ 袋

雪

雪の日は青く居る初音の那

袋

若菜

くくひにや高折と菜此下はきへ
きのふほろおそろき堅は若菜のふ

袋

若菜

若菜や日向に猫の志能おすり

袋

若菜

若菜せしるる若すま露の風

袋

春

かろくと山起のへ敷りすみな
街土の菜乃昼し燃るや春のる
席をあし片角にもし春此る

袋

燕

志賀島いま新のそくぬや村つもめ

袋

梅

咲きしあ冬とくへ敷梅の風
梅の松のて

袋

梅

ゆくしや梅踏ふ元敷梅のくへ
かちろふの雲にもゆるや戸のあ

袋

梅

ひやうりな梅乃すりこ梅へすゆらんが
ねばん會や相んすも敷菜の二葉

袋

梅

おふろおの吹ちる朝や若此音
沖桂の小松系ありは敷の音

袋

田螺

ちくろを来たあへく新田螺くふ

因

三日月の浦おろす田螺う那

袋

山吹

や乃あまやるの樽酌まついて来れ

、

山吹や何々国整ふ井戸も明

同

堇

土橋くく聖を咲かゆ敷堇の肌

、

極くくあろをお誘すをみれば

袋

空雀

孫つれあまへ杖つく空雀くふ

、

空ひろくあけの山道のひはりの肌

因

梅

やま人多物同やすーはつさく

、

何ハおお木履の何やや山吹丸

袋

蛙

夕月を背やよ尺せそ蛙う那

、

きくこのとろつむく毎う蛙う那

因

上巳

曲水中船をけうれそさむ時

、

塩谷をさくくくくく離うな

、

桃

化粘田の垣より新くく桃花を

袋

きく似れかふも明くくも、の茶

因

藤

蕨

暮暮

月のちふ人きく白ふや藤月花
 中よりふふれものあり蕨の世
 足^大運の髪よそろへ蕨蕨の那
 子を引く連ハ赤れ蕨クな
 ゆく時も松くきききききき
 竹は乾や細よとほくぬ橋川
 因、袋、因、袋、

復

更衣

麦秋

河骨

夜菊

扇

五月夜

藤^草——まきもねよくや衣文
 花色く松くきききききき
 麦刈多芽よあきまや秋の風
 河骨の猪首もすく——お此人
 夜菊よねき田とハ流や麦をこり
 祇園まきき日陰此扇の那
 雨をいふ語ま月日や五月夜
 五月夜やおのすくきききき
 因、袋、因、袋、

鯉 ても川鯉舟の一葉も——の秋時
 管 苔舟まほ——のひくさよ露の
 葉陽ま あちさのや軽くくハ秋月形
 桐心 遠河けく鶴又依や桐子(此)甘
 瓜 口上のお事さむずめや初ま瓜
 蓮 丈六より仙くまもあり蓮のむ
 牡丹 蝶の髪ふくさにつくむ牡丹ふ
 芥子 菜はききゆの麻おとく水菊のせ
 袋

鍋牛 柴の戸も向と数角あり鍋牛
 蝶 仙人此基も日陰なり蝶乃あ
 郭公 おも——海——今こハ古葉よ不き
 凍鼓智 喜柄もつをひくふろやはひき
 さりのくま思まをこひ
 推ヤもあくは折戸も——んこ
 豆 豆とく数芥子まひくやうんふと
 卯 卯の花此をねま似たり証のあ
 卯 乃志のはは数や月の欠れ時
 袋

仙生會

杜若

新樹

舟子

風車

山の日より人を吾子や仙生會
 舟ハ新乃志ほけなり仙生會
 乃々嘆西地通りヤカきつは
 又又来ひやふとはの橋中杜若
 踏の羽もは黄も吹や夏木立
 舟乃子や菴に泳ぶるるややり
 吹とと風松も尺せぬや風くる回
 牛の子も夢くちりけと風車
 家 家 家 家 家 家 家

田柵

涼

夕魚

夕魚

夕魚

柵のくもも縮つるや夏苗丸
 松木ちりひやりとまき敷く回るる
 中の帆もあゝ乃乃走涼涼う那
 新坊に川あるこせとすみりふ
 夕々不や里のほありを暮るる嘆
 中お新や田舎ハ唄も下地歌
 似せと尺と草拾山や雪のこね
 中お立や堤の舟も水くる回
 家 家 家 家 家 家 家

百合

聖あらずあゝ蓋あり百合の花
菫のけしき子をすくはさやうど
園

秋

七夕

立琴や星よむ指のひらあ
かほきやあのもやうハひらつ橋
待は来ほひまはあハ水乃つり
於子も けしきつけ玉はつり
園

魂

稲妻

稲妻や山も森ささげあけて行
いをつら角力乃園きつてゆく
園

蓆

并根の風を掃むすききうな
月をねくちうハあつて蓆の那
園

二日月

はねつけて秋志つまるや二日月
二日月や月を足合すまきま
園

女郎

整紋乃襟やいろくをみあ
つら水てい走へほいれや女郎
園

砧

抱寄

言時和

錦以

志野

松風もきくけは條表きぬる系

ゆわく水乃山を巻出む砧の那

裏賣る酒は着うへ表お寄るな

飼鳥此産あろのそくおさむか

菊の香乃おまつくや表——水

雲あ——此産あちう——寄——秋

信梯梯の白をの抑くや錦既表

休地：みやけと表と表む町が

芝野

初力
初力

秋凡

登

紅毛

新魚や大工の砥水澄んて居表

あさりかき居はあすろと志ほおろ

はつ汐や月のくくけ表急とあ——

秋凡や表くく水とる乃表

居凡ととお入るあうきりくす

行燈の家をたきりききうくん

登すへる版表合はみちうふ

嫁入乃及くも表と表お寄る

尾赤

松風乃遠河りきす表尾花系

日のあけ此海へとくぬ尾赤う風

早稲

早稲の香やき陽に吹出む影あけ

菊

菊はくや帯乃足のみ水てく

鶉

餅屋もも砂の交あつてくあ

明是るあをみいこ詩の那

名月

名月を埋きくひく一草の巻

名月や風さへ足登るむすき

名月

南風のかげ乃緒寄一はの月

きせ縁をえし目を丸一十三お

落水

徳家の灯此隣きへり落水

桑山子

幼沙は是あけハヤれかりくな

麻

あけ麻を岩もむ来きり麻の影

蜻蛉

多穂を足わけて長れん不が

名月

掛物を足ふも遠るや秋のく小

ゆく秋や一葉溜る暮暮乃花

冬

時

つくり木の糸もゆい糸や初とれ

時

葛一 把牛よりふせりく水りな

時

木啄をふかきふ道ふやれさのち

時

雪

く川流や山も尾をあけてゆく

時

落葉

かく氷家へ月の夜つくねちふふ

時

ちつきれつ清道りける木のくりれ

時

枯野

ほつすくふるあつハ水も枯野うふ

時

ありまきさふちり道志水ぬかれ野が

時

雪

うさ、ゆき火神乃きりききりぬ

時

去るやれ屏風の何とれさむほりな

時

連産忌

連産忌や桑谷乃くハ人も新法ゆ

時

連産忌や何とれすへてしりるほり

時

水多

朽くもれきりひは隠す産野のぬ

時

門守れ候志つらなり地の野

時

風

風や打きぬ柳をねしすこし

袋

か〜〜やふき時の水車

同

留不

か〜り花床もせぬ流す春の暮

袋

舟の春ゆ〜と又水も〜〜

袋

頂中

鼻を〜り入れ頂中の那

袋

大根

傾城にお〜〜おむつきんが

同

大根

海となま〜り舟乃大根引

袋

大根

い海志ろふ脛と〜〜るや大根引

袋

千々

凡の實此いおちそみゆれ村を多

袋

ひとりよし舟お浪時や川ちやり

同

十ね

水多冬き〜〜くは〜お〜那

袋

十ね

玉多し〜^軒つゆく表十夜〜肌

袋

十ね

細豆の床おハ〜〜り〜〜き

袋

十ね

おふ〜乃拍子よき〜〜瓢〜ふ

同

火燈

去聲尺表脚〜ハ〜り〜火燈〜

袋

火燈

痛ふろひ〜は〜〜のきき火燈〜

袋

冬牡丹 冬牡丹 冬牡丹 冬牡丹 冬牡丹

冬牡丹 冬牡丹 冬牡丹 冬牡丹 冬牡丹

冬牡丹 冬牡丹 冬牡丹 冬牡丹 冬牡丹

冬牡丹 冬牡丹 冬牡丹 冬牡丹 冬牡丹

延享五戊辰春

書林

江戸日本橋南二丁目
戸倉屋喜兵衛
同浅州並木所
江 北 源兵衛
京寺町二條上
井筒屋庄兵衛

目録

南北抄話	前篇 上下	涼傳	みづやどり	浮囊菴 友春
伊勢のはな	武山	雙飛		
枯野問答	全	百梅		
百題集	全	百梅		
いやお及白田	東武 李超			
抄路 餘人	京傳 連中			
夏林 社中	東武 桐原			
秋 無	全 林水 蓮中			
穂家のやどり	全 蓮中			

東武浅草並木所江北堂梓行

